

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12962

研究課題名（和文）日本仏教における胎生学的教説の展開の包括的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of the Development of Embryological Discourse in Japanese Buddhism

研究代表者

亀山 隆彦（Kameyama, Takahiko）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：10790230

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：中世期以後、多くの真言僧が性愛・胎生過程に関する独自の教説を残している。それらは、真言密教の各種実践・教説・成道に関する議論で多用され、中世密教の発展にとって不可欠の基盤であったと考えられる。ただし室町以後は「邪義」のレッテルが貼られ、江戸以後、その見解が影響力を大きくしたことから、本来の評価も忘れられたと考えられる。

本研究では、以上の動向を批判的に検討し、改めて真言密教における性愛・胎生学的教説の意義を分析した。その成果として、性愛・胎生学的教説が、元々「正統」な密教思想と深く結びつき、そこから発展したと考えられること、中世後期に異端視された後も、まだ影響力を保っていた事実を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々な日本思想史や日本文化論の中で、弘法大師空海が樹立した真言密教思想がいかに重要か強調されてきた。しかし、当の真言密教思想の実態、各時代の全体像については、今なお未解明と言わざるを得ない。特に空海没後、その思想がどう展開したかについては、専門家の間でも、まとまった見解は発表されていない。

本研究は、第一に、このような思想研究の課題解決を目指したものである。さらに、本研究では、真言密教が最も大きな社会的影響力を発揮した時代、具体的にいかなる思想が流通していたか。新たな視点から考察を試みた。その成果は、今後の日本仏教研究のみならず、日本思想・文化の理解にとっても有意義なものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Since the medieval period, many Shingon Buddhist monks described multiple teachings concerning the sexual and embryological issues. These teachings were frequently used in the diverse discussions on Shingon Buddhist practices and doctrines and are considered an essential foundation for the development of medieval Esoteric Buddhism. After Muromachi period, however, they were regarded as evil teachings. It seems that as their views gained greater influence during Edo period, their original significance were gradually forgotten.

In this research, I critically examined the above view and attempted to reconsider the significance of the sexual and embryological discourses in Shingon Esoteric Buddhism. The results of the research are as follows: (1) the sexual and embryological discourses were fundamentally connected to "orthodox" Esoteric Buddhist thought and developed from it; (2) even after being regarded as heretical in the late medieval period, they still maintained the influence.

研究分野：仏教学、日本仏教、日本思想

キーワード：日本仏教 密教 身体論 胎生学 真如論

1. 研究開始当初の背景

(1) 密教における性愛・胎生学的教説の概要

男女間の性愛行為とその結果である胎生をとりあげた密教教義として、主に9世紀以降、インドからチベットを經由して展開した「後期密教」(タントリズム等と呼称される)の「秘密灌頂」、あるいは「究竟次第」等に含まれる性的ヨーガ説が先ず想起される。

しかしながら、多くの先行研究を通じて指摘されるように、かつて日本の真言密教にも、それらとよく似た教説が存在した。すなわち、平安時代末期から室町時代、主に中世と呼ばれる時代、人間の性愛と胎生に関する次のような教説が、東寺、高野山、醍醐寺、仁和寺といった拠点寺院で学ぶ真言密教僧の間で連綿と相伝されていた。

第一に、男女間の性的結合を通じて「赤白二滲」(男女の精子と卵子)が融合し、女性の子宮に「羯羅藍」と呼ばれる受精卵が形成される。この懐胎の過程は、胎蔵と金剛両部の曼荼羅と大日如来、および「理」「智」二原理の根本的な「不二」を象徴し、そこから、密教の修行者と尊格間の「瑜伽」(ヨーガ)の奥義そのものと理解される。

第二に、受精卵=羯羅藍が四肢を具えた胎児に生育するまでの五つの段階(胎内五位)は、真言密教の教主大日如来のさとり階段を意味する「五転」と「五相」、両部曼荼羅の中心に座する五体の仏(五仏)、五体の仏の五種の智慧(五智)、東西南北中の五つの方角(五方)、さらに、密教の入門儀礼である灌頂の五つの階位とも結び付けられる。

さらに、これら要素間の結びつきは、文献によっては「胎内五転の曼荼羅」と呼ばれ、世俗の凡夫身と聖なる仏陀の身が本来平等であること、凡夫の不完全な肉体にも完全な仏のさとりが存在することを象徴しているとも主張される(亀山隆彦『理趣経秘決鈔』にみる「灌頂成仏」説、『密教文化』238、2017年)。

真言密教の修行者は、これら「胎内五位」「五転」「五相」「五仏」「五智」「五方」の、そして灌頂の各階位間の対応関係、つまり「胎内五転の曼荼羅」を同じく灌頂儀礼の中で直観し、そこから自らの肉体とブツダの身体の瑜伽に対する深い信心を獲得する。このような信心の獲得はまた、修行者の覚りの達成に直結するとも説かれた。

胎内五位	五方	五智	五転	種子	灌頂の階位
初位(羯羅藍)	東	大円鏡智	発心	《hūm》	「三昧耶戒儀式」から「灌頂道場投花位階」まで
二位(額部曇)	南	平等性智	修行	《raḥ》	「頂灌五智瓶水而成五仏灌頂之位」
三位(閉戸)	西	妙觀察智	菩提	《hrīḥ》	「瓶水之後伝授三十七尊印明」
四位(健南)	北	成所作智	涅槃	《ah》	「於華台上受得八種之授物」
五位(鉢羅奢佉)	中	法界体性智	方便具足	《vaṃ》	「受得大阿闍梨位印明並受大阿闍梨供養等」

胎内五転の曼荼羅 (一部)

(2) 日本密教における性愛・胎生学的教説の展開

以上のような人間の性愛と胎生に深く関わる教説が、いつ真言密教の中に生じ、いかなる経緯で発展したか。この問題に関する先行研究の見解は、概ね次のようにまとめられる。

小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』(森話社、2014年)は、平安時代末期に制作された『一尋集』『打聞集』といった文献の分析に基づき、性愛・胎生に関わる教説は、「十二世紀に現れ、十三世紀に大きく展開を遂げた」(小川前掲書、486頁)と指摘する。すなわち、11~12世紀半ばの院政期と呼ばれる時代は、「赤白二滲」「胎内五転の曼荼羅」といった性愛・胎生学的教説にとって、一種の揺籃期に当たると考えられる。この時期を経て、続く13~14世紀、所謂鎌倉から南北朝期にかけて教説は大きく花開いた。

同じく中世日本密教における性愛・胎生学的教説、およびそれに基づくヨーガ・マンダラ解釈の実態に関する近年の研究成果としては、ルチア・ドルチェ・松本郁代編著『儀礼の力 中世宗教の実践世界』(法蔵館、2010年)も挙げられるが、教説の展開に関する基本的理解は、小川のそれと大差ない。

次に、性愛・胎生学的教説の終焉だが、守山聖真『立川邪教とその社会的背景の研究』(鹿野苑、1965年)によれば、13~14世紀までに複雑に発達した性愛・胎生学的教説は、室町時代の半ばに「邪義」のレッテルを貼られ、異端思想として激しい排斥運動にさらされる。この時点で、真言密教における性愛・胎生学的教説の命脈は尽き、後代の密教僧に、いかなる思想的影響を与えることも無かったと推定される。以上が、守山、および水原莞栄『邪教立川流の研究』(全正舎書籍部、1923年)の基本的な理解である。

しかしながら、ジェームズ・サンフォードの研究を参照すると、守山・水原の主張には疑問も残る。James H. Sanford, "Wind, Waters, Stupas, Mandalas: Fetal Buddhahood in Shingon" (*Japanese Journal of Religious Studies* vol.24, no.1-2, 1997) で紹介された資料を見る限り、性愛・胎生学的教説は室町後期、さらに江戸期に入ってもその影響力を失うことはなかった。少なくとも江戸初頭までは、真言僧がヨーガ・マンダラの意義をより深く理解し、「自分の肉体が本来的にブツダである」(「自身本仏之道理」と固く信じるためにそれらは不可欠であったと推測される。

2. 研究の目的

先行研究における課題の設定と視点、および方法を総括すると、そこには、いくばくかの偏向が見出される。すなわち、先行研究の中心的な課題は、概ね鎌倉期から南北長期の日本密教における性愛・胎生学的教説の伝承に限定され、教説の室町後期や江戸期の展開に言及することは、極めて稀である。さらに、『大日経』『金剛頂経』『理趣経』『菩提心論』といった正統な密教経論の教説との連続性に関する検討も、十分にはなされていない。

以上の問題点を踏まえて、ジェームズ・サンフォード (“Wind, Waters, Stupas, Mandalas”) が考察の対象とした室町期成立の密教典籍、例えば『不動尊愚鈔』や『根吼抄』の記述を詳しく検討すると、そこに説き示される灌頂や修法理解の根底には、「胎内五転の曼荼羅」からの深い影響が確認できる。そこから、近世に入っても、それら教説が異端思想と呼ばれることは多くなく、むしろ室町から江戸期の真言宗でも、その教理・実践の中核を担う重要思想であったのではないかと推測を立てることができる。

本研究は、以上のサンフォードの研究成果を出発点に、近世初頭期の真言宗の中で、性愛・胎生学的教説がどのように理解されたかを考察する。さらに、小川等の見解を踏まえ、中世から近世の真言思想の展開に、性愛・胎生学的教説がどのように関わるか解明する。具体的には、院政期以降、真言密教僧が連綿と伝えてきた性愛・胎生学的教説に関する以下二点の仮説を論証する。

第一に、日本密教の性愛・胎生学的教説は、中沢新一『悪党的思考』(平凡社、1988年)等で指摘されるように、深い構造の次元では後期密教の性愛思想に完全に違背する。同じく構造の次元で見た場合、むしろ、弘法大師空海『即身成仏義』に由来する真言密教の正統な瑜伽・曼荼羅理解、あるいは、「即身成仏」との間に強い連続性を保持している。

第二に、教説は、鎌倉から南北朝期にかけて大きな影響を誇ったが、室町のある時期に大きな排斥運動が起こり、終息に向かったと主張される。しかし、そのような推定に反して、排斥運動以降の真言僧の著作にも「胎内五転の曼荼羅」「赤白二帝」の概念は頻りに登場する。教説は、近世に入っても、深い影響を与え続けていたと考えられる。

ここで第一の仮説について少し補足しておく、同じく平安末期の真言宗において、空海の即身成仏に基づく、「五蔵曼荼羅」と呼ばれる独自の身体曼荼羅思想が確立される(頼富本宏「密教の受容した五蔵説：胎内納入品と覚鑿の『五輪九字明秘密釈』を中心として」『東方宗教』90、1997年)。本研究を通じて、この「五蔵曼荼羅」と「胎内五転の曼荼羅」が、ほぼ同じ構造を有す曼荼羅の教えであることを証明する。

3. 研究の方法

引き続き、本研究の方法を概説すると、今日、SAT(大正新脩大蔵経テキストデータベース)、あるいは、CBETA(電子仏典集成)といった大規模な仏典の電子テキストデータベースが登場したことで、仏教文献学や仏教教理研究の方法は大きくアップデートされた。すなわち、かつてない規模で仏典の一括検索が可能となり、典籍間、あるいは教説間の知られざる対応関係や系譜を知ることが出来るようになった。

本研究でも、第一に、このテキストデータベースを全面的に活用し、室町後期および江戸期の真言僧の著作に登場する性愛・胎生学的教説を特定し、それらがいかなる文脈で登場するか分類・分析する。すなわち質と量の両面から、近世の真言宗における教説の広まりを考察している。その上で、古典文献学の方法論を緻密に用いて、各教説の内容を吟味し、それが日本密教独自の瑜伽・曼荼羅理解、および即身成仏思想に由来することを証明している。

また、先行研究でもたびたび問題とされるように、性愛・胎生学的教説に言及する文献の中には、著者と著述時期の両方が不明なものも少なくない。また、著者の名が記されていたとしても、内容から「仮託」と判断される場合もある。つまり、教説の詳しい検討以前に、取り扱う文献の著者、および著述年代を慎重に同定する必要がある。

本研究では、主に龍谷大学大宮図書館に収蔵される古写本や刊本を活用し、文献の校訂作業を随時進めることで、この問題の解決に努めてきた。

4. 研究成果

改めて本研究の目的をまとめると、前近代の日本密教、なかでも真言宗で発達した性愛・胎生学的教説の発展史、および思想的実態・意義を解明することである。

中世から近世にかけて、多数の真言密教僧が、人間の性愛と胎生過程に関する独自の言説を残している。その思想的意義だが、これら言説は、真言密教の各種実践・教理・成道に関する議論でも多用され、日本密教思想の発展にとって不可欠の基盤であったと考えられる。ただ、室町以後は「邪義」、つまり正統密教に対する異端とも考えられ、江戸以後、その見解が影響力を大きくしたことから、先行する正当な評価も忘れられた。

本研究では、このような動向を批判的に検討し、改めて、真言密教における性愛・胎生学的教説の思想的意義を明らかにした。具体的には、様々な文献の読解と分析に基づき、(1)性愛・胎生学的教説が、「正統」な日本密教思想と深く結びつき、そこから発展したと考えられること、(2)中世後期に異端視された後も、まだ影響力を保っていた事実を指摘した。

本稿の締めくくりに、ここで紹介した(1)(2)のフレームに則って、本研究の主要な成果について概観しておきたい。

(1)性愛・胎生学的教説と「正統」な日本密教思想の関連

“Visions of Yoga: Development of the Five Viscera Mandala in Japanese Esoteric Buddhism” (Esoteric Buddhism and East Asian Society, 2020)

カナダで開催された国際カンファレンスでの英語発表。中世真言密教に独自の身体思想は、大きく性愛・胎生学的教説と、「五蔵曼荼羅」と呼称される生理学的言説から成る。本発表では、それら教説の平安時代から南北朝期の展開を概観し、その思想的意義と内的繋がりについて議論を試みた。

“Articulating Inner Dharma: The Development of the ‘Five Viscera Mandala’ in Japanese Esoteric Buddhism” (Kyoto Lectures 2020-09, 2020)

英語での招待講演。同じく真言密教独自の身体思想とみなされる五蔵曼荼羅に関して、胚胎期と考えられる 8 世紀中国から、院政期を経て鎌倉末期の日本に至る展開史を考察した。具体的には、五蔵曼荼羅が、平安末期に即身成仏思想と結びついた密教瞑想法に変化し、鎌倉末期には、真言の教学と儀礼の両方にまたがる釈義学の役割を果たすようになることを指摘した。

“The Discourses on the ‘Dharma Realm’ (*hokkai*) in Medieval Shingon Buddhism” (American Academy of Religion 2020 Annual Meeting, 2020)

Japanese Religions Unit 内のパネル “Theme: Examining the Scholarly Guilds of Shingon Buddhism in Medieval Japan” の一部として行われた英語での口頭発表。真言宗に伝わる教理問答である「一法界多法界」を検討し、中世真言僧の宇宙や世界をめぐる記号論的理解、および教説と密教儀礼の結びつきについて議論を行った。

「安然における六即と即身成仏」(『世界仏教文化研究論叢』59、2021 年)

日本語論文。平安初期の天台僧安然の思想が、生涯の前期から後期にかけてどう展開したか考察した。具体的には、初期・後期それぞれの著作の即身成仏説を分析し、次の事実を解明した。先行研究によれば、安然の即身成仏は、二十代後半の著作以降、大きな変化はない。ところが、実際は、四十代までに空海の真言宗も含む密教の教えから深く影響され、その即身成仏思想も、密教教学を踏まえ大きく変化していたことが分かった。

「日本仏教思想史における安然の意義：真如論を中心に」(仏教史学会 10 月例会、2021 年)

日本語での招待講演。平安初期の天台僧安然の様々な著作を検討し、即身成仏を含む様々な教説を支える真如論の全体的構造について解明を試みた。安然是、著作の中で「随縁」と「不變」の二種の真如に言及する。従来の研究では、前者の随縁真如が中心的な教説と主張されるが、本発表では、後者の不變真如が重要である点を指摘した。

「日本密教の言語哲学」(GARC1 研究ワークショップ、2021 年)

日本語での招待講演。安然の著作に示された真如論を踏まえて、平安末期の真言僧覚鑿の著作を検討し、前者の真如論が、後者の五蔵曼荼羅と深く関連する可能性を議論した。具体的には、人間の五臓を五体の仏とその智慧、宇宙を構成する五つの要素等と同一視する五蔵曼荼羅の発想の背後に、安然の不變真如の思想が存在することを、文献学の視座から論証した。

「安然における不變真如の理解」(『密教文化』247/248、2022 年)

日本語論文。不變真如を重視する安然の真如論の思想系譜について、考察を試みた。すなわち、安然に先行する湛然や最澄といった天台僧は、随縁真如を中心とする真如論を主張する。安然是、それら祖師の教説を分析し、その中に欠けていた真如と諸法の双方向的関係を確立するために、独自の不變真如を確立した可能性を議論した。

“Kakuban’s Views on the Suchness: An Analysis of the *Gorin kuji myo himitsu shaku*” (『印度学仏教学研究』70、2022 年)

英語論文。平安末期の真言僧覚鑿の主著とされる『五輪九字明秘密積』を分析し、その中に説き示される真如論と五蔵曼荼羅が、言説の構造の次元で相互に深く関連することを指摘した。

(2)中世後期以降の性愛・胎生学的教説の意義

「異端の厚い記述：日本仏教文化における立川流の複数性」(第 3 回 EAJS (ヨーロッパ日本研究協会) 日本会議、2019 年)

日本語での口頭発表。鎌倉時代の末期、東寺復興に貢献した我宝や果宝といった真言僧が、胎生学的教説も「正統」な真言密教の一部と断言し、それが邪教となるのはあくまで修行者側の理解・意識の問題と断言している事実を、新たな証拠も踏まえて検討した。

「癡兀大慧における八識と肉団心」(『印度学仏教学研究』68、2020年)
日本語論文。鎌倉末の臨済宗聖一派の僧、癡兀大慧の講義録と伝えられる『菩提心論随文正決』では、有情の心臓と第八阿頼耶識を同一視する、先行研究の言葉を借りれば、具体的・現実的な第八識を心の源と考える心識説が説かれる。本論文では、その心識説と中世真言僧の様々な口伝を比較し、癡兀大慧の主張の基盤は、平安末から鎌倉期の真言宗で展開した菩提心理解であることを指摘した。

『日本仏教と論義』(法蔵館、2020年)
本書第二部「天台・真言の論義」に、日本語論文「中世東寺の教学と「論義」」を寄稿。鎌倉時代末期の東寺僧泉宝は、若年・中年・晩年のそれぞれで修学の姿勢が変化することが指摘されるが、その変化が、思想と教学の内容にも影響を及ぼしていることを「論義」関連著作の検討を通じて指摘した。

“The Red and White Drops and ‘Wrong Views’ in the *Konko sho*: The Significance of the Sexual and Embryological Discourses in Early Modern Shingon Buddhism” (『印度学仏教学研究』69、2021年)
日本語論文。真言密教の邪流といわれる「立川流」も、歴史的には複数の存在であり、従って、胎生学的教説、「邪義」という評価、そして立川流という法流間の垂直的繋がりには成立しえない。本論文でも、同様の視点から真言宗の胎生学的教説の意義と、正統と異端の境界を分析している。具体的には、16世紀の教雅が記した『根吼抄』を検討し、中世末から近世の真言宗に、異端 = 立川流と正統 = 『宝鏡抄』を同じく批判する、第三の立場がありえた可能性を指摘した。

『中世禅の知』(臨川書店、2021年)
第一部収録の論考「禅研究の現在地 ベルナル・フォルを中心に」と、第二部収録の論考「聖一派における「禅密」 癡兀大慧の理解を中心に」の執筆を担当。第二の論考では、鎌倉中期～後期に活躍した禅僧、癡兀大慧の禅密思想を分析し、その中の性愛・胎生学的知識の意義を概観した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 247/248
2. 論文標題 安然における不変真如の理解	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 密教文化	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 70
2. 論文標題 Kakuban's Views on the Suchness: An Analysis of the Gorin kuji myo himitsu shaku	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 213-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 6
2. 論文標題 真言密教における真理と言葉：空海『弁顕密二教論』の思想的意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ひらく	6. 最初と最後の頁 176-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 5
2. 論文標題 海を越える密教の思想：空海における「即身」のビジョン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ひらく	6. 最初と最後の頁 225-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 亀山隆彦、Bruce Winkelman (翻訳)	4. 巻 47-1
2. 論文標題 The Doctrinal Origins of Embryology in the Shingon School	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Religious Studies	6. 最初と最後の頁 85-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 69
2. 論文標題 The Red and White Drops and "Wrong Views" in the Konko sho: The Significance of the Sexual and Embryological Discourses in Early Modern Shingon Buddhism	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 1178-1183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 59
2. 論文標題 安然における六即と即身成仏	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界仏教文化研究論叢	6. 最初と最後の頁 123-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 52-8
2. 論文標題 日本仏教における「問答」の歴史と意味：徳一『真言宗未決文』を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 274-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 亀山隆彦	4. 巻 68
2. 論文標題 癡兀大慧における八識と肉団心	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 619-623
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 『根吼抄』にみる赤白二諦と「邪見」：近世真言宗における胎生学的教説の意義
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 The Discourses on the "Dharma Realm" (hokkai) in Medieval Shingon Buddhism
3. 学会等名 American Academy of Religion 2020 Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 Articulating Inner Dharma: The Development of the "Five Viscera Mandala" in Japanese Esoteric Buddhism
3. 学会等名 Kyoto Lectures 2020-09 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 海を越える密教思想：平安初期日本仏教と弘法大師空海
3. 学会等名 仏教とその源流～祈りと儀礼～（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 異端の厚い記述：日本仏教文化における立川流の複数性
3. 学会等名 第3回EJJS（ヨーロッパ日本研究協会）日本会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 中世密教の宗教テキストの展開：覚鑿を中心に
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会第4回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 癡兀大慧における八識と肉団心
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 Visions of Yoga: Development of the Five Viscera Mandala in Japanese Esoteric Buddhism
3. 学会等名 Esoteric Buddhism and East Asian Society (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 日本仏教思想史における安然の意義：真如論を中心に
3. 学会等名 仏教史学会10月例会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 日本密教の言語哲学
3. 学会等名 GARC1研究ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 覚鑿の真如論：『五輪九字明秘密積』を中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 亀山隆彦
2. 発表標題 安然における真如不変の思想
3. 学会等名 2021年度密教研究会学術大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 末木文美士、榎本渉、米田真理子、亀山隆彦他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 中世禪の知	

1. 著者名 楠淳證、野呂靖、亀山隆彦他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 624
3. 書名 日本仏教と論義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------